

2023年2月5日 礼拝説教要旨

詩編講解説教136「救いを歌う民」

詩編136：1～26、コロサイ3：12～17

詩編第136編は一度読んだら忘れられない、とても印象的な詩編です。すぐ目に留まりますのはやはり繰り返し（リフレイン）の部分でしょう。「慈しみはとこしえに」26回全く同じ言葉が繰り返されます。この「慈しみ」（ヘセド）は詩編の説教でも何度も取り上げてきました。わたしたち人間の状況に関わらず、決して変わることはない神さまの不変の契約のことです。あるユダヤ人の聖書学者は、この26という数字に注目して、神さまの名である「ヤハウェ」これを構成するアルファベットの4文字（YHWH）がそれぞれ数字を表していて、それを足すと26になると言っています。こういう言葉遊びもおもしろいのですが、この詩編は26節の中でわたしたちの信じている神さまがどのようなお方であり、また具体的に何をされたのか。それによって神さまはわたしたちにとってどういう存在なのか。ズバリ神さまとは誰かを歌っている。それは言わば信仰告白のような詩編です。

少し全体の構成を見てみましょう。内容はいたってシンプルなものとして、まず1～3節では神さまがどのようなお方であるか。それは「恵み深い主」であり「神の中の神」「主の中の主」であるということ。この詩編の背景にもやはり捕囚後のペルシャ時代が考えられますが、異教の神々の中で、イスラエルの神の優位性、絶対性が歌われています。続いて4～9節、ここには天地創造のことが歌われています。特に天と地を造られ、光を造られた。そして昼と夜を分けられたことが取り上げられています。さらに10～22節までは出エジプトの出来事が記されています。エジプトに下された十の災い、初子を撃った話からエジプトを脱出して葦の海を分けた話、荒れ野を導かれて約束の地カナンへ入植する話です。そして最後23～26節は結びです。これは神さまがわたしたちにとってどのようなお方なのかを簡潔にまとめられていると言ってよいでしょう。このように見てまいりましても、この詩編が信仰告白的であるという意味がよくお分りではないかと思えます。

わたしたちも礼拝の中で信仰を告白します。使徒信条や日本基督教団信仰告白を用います。これはとても重要なこととして、わたしたちが信じている対象、神さまがどのようなお方であるのか、何をなされたのか。それを明確にするわけです。一般的に、信仰と言いますと、信じる主体である自分に重さが置かれることがあります。「鯛の頭も信心から」ということわざに象徴的ですが、それがどのような対象であれ、信じる自分の心次第だということでしょう。つまり救いは信じる自分にかかっていると理解するわけです。自分の強い信仰、熱心さに救いはかかっていると。けれども聖書の信仰はそれとは正反対として、信じる側の問題ではなく、信じる対象が重要なのです。神さまはどのようなお方であるか。何をしてくださったのか。それがわたしたちの救いを左右しているのです。自分が何をしたとか、何ができるかは問題ではない。でもこれはよく考えれば分かることでしょう。救いが自分にかかっているというならば、もはや神さまなど必要ないのです。自分がしっかりしていればそれでいいということになります。鯛の頭も神さまになるのです。でもそれはかなり心もとないことではないでしょうか。わたしたちはそんなに強くないし、しっかりしていません。だからこそ救いが必要なのです。

神さまについて最後の結びはこう告白します。「低くされたわたしたちを御心に留めた方に感謝せよ。慈しみはとこしえに。敵からわたしたちを奪い返した方に感謝せよ。慈しみはとこし

えに。すべての肉なるものに糧を与える方に感謝せよ。慈しみはとこしえに」(23～25節)  
「低くされた」というのは具体的には捕囚の出来事を読み取ることができますが、踏みにじられて苦しむ経験です。人としての尊厳を踏みにじられる。命を軽んじられる。この世界はそういう現実に溢れているでしょう。戦争があり、様々な形で差別、偏見などの人権侵害が起こります。それは神さまから離れた罪の結果です。そのような低くされた、罪の中に囚われているわたしたちに神さまは御心を留めてくださる。これは思い起こしてくださる、思いを寄せてくださるということです。

そしてただ思い起こされるだけではなく、「敵からわたしたちを奪い返した方に感謝せよ」(24節)「敵」というのはここでは具体的にイスラエルを苦しめた敵の存在を指しております。わたしたちにしてみれば、それはわたしたちを神さまから引き離し、罪に陥れるサタンと理解してよいでしょう。その悪魔の支配からわたしたちを奪い返してくださる。ここまで読みますと、この詩編がイエス・キリストの救いを雄弁に語っていることに気付かされるでしょう。神さまは愛する御子を世にお遣わしになりました。神さまはわたしたちを御心に留めてくださり、低きに降られたのです。そして十字架とよみがえりの御業によって、わたしたちを悪魔の支配から奪い返し、罪から解放してくださいました。パウロは「従って、今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです」(ローマ8：1～2)と言います。わたしたちはキリストによって罪から解放されました。そして神さまはこの救いによって、絶えずわたしたちを養われます。この命の糧こそ、まことのパンとして与えられたイエス・キリストに他なりません。この救いは永遠です。ひとときの安らぎではありません。「このパンを食べる者は永遠に生きる」(ヨハネ6：58)のです。たとえ死に際しても、それが神さまの慈しみを遮るのではない。神さまの慈しみはとこしえに、永遠に続きます。

先週は葬儀がありました。式が終わって出棺の時になって、ちょっとしたハプニングがありました。火葬場に行く霊柩車がまだ到着していないのです。霊柩車を待っている間、讃美歌を歌って待ちました。復活の讃美歌を3、4曲歌ったのでしょうか。コロナで賛美を控えている中、おかげで賛美の溢れる葬儀になりました。もちろん悲しみはあります。でもそれは希望のある悲しみです。「慈しみはとこしえに」と歌いながら、わたしたちは送り出すことができます。たとえ死の悲しみの中にありましても、その先にあります永遠の命を望み見ながら、わたしたちは神さまの救いを讃えるのです。